

青少年教育施設における伝統文化実践研究事業（報告書）

～地域の伝統文化を活かした体験活動プログラムの導入にむけて～

2025 年 3 月

目次

はじめに	1
1. 伝統文化体験の重要性	2
- 1 持続可能な開発のための教育と伝統文化体験	2
- 2 青少年教育施設において伝統・文化体験活動を提供することの意味と課題	3
- 3 ESD 推進のための事業モデルの検討	4
(1) Ajzen (1991) の「計画的行動理論 (<i>Theory of Planned Behavior</i>)」	4
(2) Schwartz (1977) の「規範活性化理論 (<i>Norm Activation Theory</i>)」	4
(3) 広瀬 (1995) の「環境配慮行動の要因関連モデル」	5
- 4 地域の伝統・文化を体現する「伝統工芸品」	6
2. 地域資源について	8
- 1 地域について	8
- 2 地域資源について	8
3. 地域資源の言語化から伝統文化体験プログラムへ	11
- 1 地域資源の言語化の必要性	11
- 2 ストーリーテリング、情報と情報のデザイン	11
(1) 記号というデータを情報に変え、物語を紡ぐ	11
- 3 ストーリーテリングから事業へ（事例）	13
(1) 福岡県筑後地域のハゼノキと櫨の和紙	13
(2) 愛媛県喜多郡内子町の大洲和紙	16
4. 研究実践事業報告	18
- 1 櫨の和ろうそく（福岡県）	18
(1) 事業概要	18
(2) 結果	20
(3) 考察	23
- 2 大洲和紙（愛媛県）	24
(1) 事業概要	24
(2) 結果	27
(3) 考察	29
5. まとめと課題	31
参考・引用文献	33

はじめに

地域の伝統文化や自然環境は、その土地の特徴やアイデンティティを形成する重要な要素である。これらの地域資源は、地域社会の活性化や持続可能な未来を築くための鍵になるとともに、多様性豊かな文化を次世代へ継承する貴重な財産でもある。本報告書は、地域資源を活用した体験プログラムに焦点を当て、それが地域社会や青少年教育にどのように寄与するのかの検討結果の一端を示すものである。特に、大洲和紙の製造過程や櫨の和ろうそく作りといった伝統工芸を題材にした具体的な実践研究事例を通じて、地域資源の価値を最大限に活かすための取り組みや課題を明らかにしている。

本報告書では、地域資源情報の編集とストーリーテリングという観点から、データを情報へと変換し、物語を紡ぐ過程の重要性に着目している。このプロセスを通じて、地域資源が持つ潜在的な価値を掘り起こし、その魅力を効果的に発信する方法を探求している。また、青少年教育施設が地域資源を活用した体験型プログラムを実施する意義についても掘り下げ、次世代リーダーの育成や文化の継承、地域社会とのつながりの強化という幅広い視点から検討している。このようなアプローチは、単なる教育活動にとどまらず、地域内外の人々が共有する価値を創造する契機となるものである。

さらに、2023 年度に実施した大洲和紙と櫨の和ろうそくを題材とした体験プログラムの成果と課題を詳細に分析し、効果的なプログラム構成や参加者の意識が変容する過程を提示している。これらの事例を通じて得られた知見を基に、地域資源の持続可能な活用方法や、新たな教育モデルの可能性を提案することを目的としている。地域資源が地域の人々や訪問者にとってどのような価値を持つのか、その認識を深めることが、今後の地域振興や教育活動の発展において重要な鍵となるであろう。

本報告書は、地域資源の編集と活用を通じて、地域文化を保護し次世代に伝えるための効果的な手法を模索する皆様に、新たな視点と実践可能なアプローチを提供するものである。この内容が、地域社会の持続可能な未来を築くための議論や活動の一助となることを願っている。

1. 伝統文化体験の重要性

－1 持続可能な開発のための教育と伝統文化体験

地球規模での環境の悪化、戦争や紛争の多発、人権の侵害、飢餓、グローバル経済の進展による格差の拡大など、世界的な課題が複雑に絡み合っている。かつ問題は急速に悪化していることから、その解決に向けた取組が急務となっている。国連では、これに対応するため持続可能な開発目標（SDGs：*Sustainable Development Goals*）を定め、現在、各国がこの達成に向けて取り組んでいる。ユネスコ（2020）は、この目標達成に向けては教育が担う役割が大きいことを指摘し、中でも持続可能な開発のための教育（ESD：*Education for Sustainable Development*）は、SDGs 達成のための重要な要素であると指摘している。

こうした状況の中、国立青少年教育振興機構では青少年教育施設における環境教育の推進を図るため、2022 年度まで環境教育推進プロジェクトチームを編成し、取組事例や関連情報の収集及び発信を行ってきた。その取り組みの一つに、樋口（2023a）による「環境教育と ESD の歴史的変遷と定義」がある。そこでは、環境教育は持続可能な開発のための教育（ESD）の一概念に包摂されること、ユネスコ（2006）による国際実施計画（IIS：*International Implementation Scheme*）において、ESD の領域である「社会」「経済」「環境」の相互連環と土台は、「伝統・文化」を通して提供されることを指摘している（図 1）。

また、文化とは、その地域の背景や歴史、伝統によって異なり、人々の生き方や関わり方、行動や信念の形を決めるものであり、その中で私たちは生活しているとし、実践やアイデンティティ、価値観といった人間の発展において重要な役割を果たし、共通の目標や約束を作り上げる助けとなるとしている。

このことから、青少年教育において ESD を推進する際、地域の伝統・文化がその地の自然や産業をはじめとした人々の生活とどのように関わり、社会を構成しているのかについて考慮して事業企画を行うことの重要性が推察される。なぜなら、文化が関わるということは、人間の精神やこころという内面がどのように関わるのかということであり、教育による効果が期待されると思料するからである。なお、図 1 は、地域の伝統・文化を基底におき、そこに成り立つ社会や経済、そして自然を含む様々な環境がそれぞれの柱となり持続可能な社会が成り立つことを表しており、この 3 本柱のうちのどれかが弱く、逆に強くなったりした場合、バランスを失った持続不可能な開発ということとなる。

また我が国では、持続可能な開発のための教育に関する関係省庁連絡会議（2021）によると、“優先行動分野 2：学習環境の変革”、“優先行動分野 5：学習環境の変革”に体験活動の推進や体験活動を重視した学習を挙げ、多様なステークホルダーとの連携による若者の社会参加支援の必要性を指摘するなど、ESD と体験活動の関係性を述べている。また、文部科学省が定める各教育段階の教育・指導要領の前文や総則には、「持続可能な社会の創り手」の育成について記載されており、持続可能な開発のための教育の推進は、青少年教育施設を含めた教育全般の課題であることがうかがえる。

さらに、持続可能な開発のための教育（ESD）に関するユネスコ世界会議(2021)にて採択された

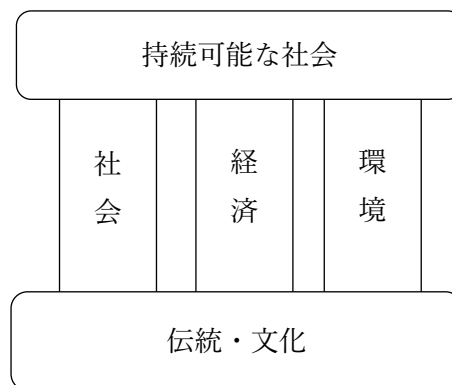


図-1 持続可能な社会イメージ

ユネスコ(2010)IIS を基に筆者作成

「持続可能な開発のための教育（ESD）に関するベルリン宣言」では、“教育は、ものの考え方や世界観に好ましい変化をもたらす強力な手段であり、開発の軌道が地球を犠牲にして経済成長のみを志向するものではなく、地球システムの限界の範囲内でのあらゆる者のウェルビーイングを志向するものであることを保証しながら、経済、社会及び環境の持続可能な開発のあらゆる側面の融合を支える”と宣言している。

これに対し日本国内では、文部科学省（2023）が示す第4期教育振興基本計画（令和5年度～令和9年度）においてウェルビーイングが明記され、“持続可能な社会の創り手育成”と“日本社会に根差したウェルビーイングの向上”が2大コンセプトとして掲げられている。ウェルビーイングについては、“身体的・精神的・社会的に良い状態にあることをいい、短期的な幸福のみならず、生きがいや人生の意義など将来にわたる持続的な幸福を含むもの”で“個人のみならず、個人を取り巻く場や地域、社会が持続的に良い状態であることを含む包括的な概念”であると定義している。つまり、個人の持続的な幸福追求の背景には地域の持続可能な社会発展が位置付けられているとも理解でき、地域の伝統や文化を尊重した持続可能な社会の創り手育成に接続することとなるのである。

これらの世界的な動きと我が国の教育動向から、青少年教育施設がESDを実践する際には、その地域の文化をしっかりと認識し、それらを活用した体験活動プログラムを作成することに取組む重要性が導き出されるのである。

－2 青少年教育施設において伝統・文化体験活動を提供することの意味と課題

前項では持続可能な社会の構築について、世界的な動向から青少年教育施設が持続可能な開発のための教育活動に取組むことの重要性をまとめた。ここでは、青少年教育施設において地域の伝統文化体験を取上げることの意味をもう少し述べておきたい。

国立青少年教育振興機構（2022a）の「青少年教育関係施設基礎調査」によると、日本国内には897（調査対象施設数）の青少年教育関係施設が存在している。設置主体は国、都道府県、市町村・組合と多様であるが、これらすべてを踏まえて考えると各自治体には必ず青少年教育施設が設置されており、言い換えれば897地域もの伝統や文化を取り扱うことが可能であると考えられる。こうした施設がネットワークでつながり、お互いの地域知、歴史知を共有できれば、わが国における持続可能な開発のための教育の推進に寄与することとなる。

同調査報告書では、青少年教育関係施設等がどのような主催事業・イベントを実施し、利用者にプログラムを提供しているのかについてまとめている。「歴史や芸術等の文化的な事業」を選択肢の一つに挙げて主催事業・イベントの内容を問うているが、この項目を伝統・文化体験活動に近いものとして読み替えて検討すると、回答した全施設の25.6%がこの事業内容を取り扱っている。また、利用者に提供するプログラムとしても問うており、これに回答した全施設の38.2%で提供しているものの、利用が多かったと回答している施設はわずかに2.3%であった。さらに、施設が最も力を入れたプログラムとして「歴史や芸術等の文化的な事業」を挙げたのはわずか1.8%の施設に過ぎなかった。同調査では、直接的に伝統・文化に関する主催事業実施やプログラム提供を問うているものではないが、伝統・文化をテーマとした事業を取り扱う傾向が低く、また施設が注力しているとも言えない状況がうかがえ、世界や国の動きに対応できていない状況が推察される。

そこで、本調査研究事業では、青少年教育施設においてどのように地域の伝統・文化を取り上げ、事業化するのか、また、これら事業をどのように評価するのかについて実践研究を進めた。

- 3 ESD 推進のための事業モデルの検討

ESD 事業のモデルを検討する際、「持続可能な社会の創り手」育成のためには、どのようにして個人の内発的動機づけを高め、具体的な行動に移してもらうかという理論的背景の構築が求められる。樋口(2024a)では、ESD プログラムによる環境配慮行動促進の効果を検討するために、心理的プロセスを 1970 年代以降の社会心理学における環境配慮行動の理論化及びモデル化の研究を整理していることから、本項では、その内容を以下に整理して記載する。

(1) Ajzen (1991) の「計画的行動理論 (Theory of Planned Behavior)」

Ajzen (1991) の「計画的行動理論 (Theory of Planned Behavior)」は、人が何か行動を起こす際、その行動を行う前に、行動しようとする“行動意図”が働く。その意図は、その“行動に対する(本人の)態度”と“主観的規範”と“行動統制感”によって互いに影響を及ぼすという理論である。この 3 要因が正に働くと、行動しようという“行動意図”が高まり目的行動が起こり易くなるが、“行動統制感”は“行動意図”だけではなく、“行動”にも直接的影響を与えるという理論である (図 2)。

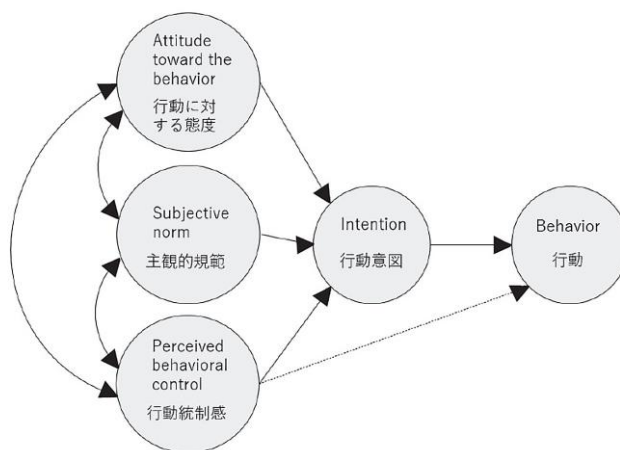


図 2 Theory of planned behavior
(Ajzen (1991) を基に筆者編集)

(2) Schwartz (1977) の「規範活性化理論 (Norm Activation Theory)」

Schwartz (1977) の「規範活性化理論 (Norm Activation Theory)」は、Ajzen (1991) の「計画的行動理論 (Theory of Planned Behavior)」のうち、“主観的規範”の“規範”の形成過程に着目した理論で、例えば、援助や利他の行動に出るための心理的プロセスを説明したものである。これまでの環境配慮行動を記述する理論として活用されてきた。

「行動」の有無に影響する“規範”としての「道德意識 (Moral)」を掲げ、これを構成する要素は「重要性認知 (Awareness of consequence)」 「責任感 (Ascribed responsibility)」の 2 つであるとしている。つまり、青少年教育における伝統文化体験におきかえと、地域の持続可能性への課題に自ら関わる重要性を認知し、他者ではなく自らが関わるべきであるという責任を感じることで、「自ら行動する」という「道德意識」が高揚し、行動が起こりやすくなるという理論である。

(3) 広瀬 (1995) の「環境配慮行動の要因連関モデル」

「規範活性化理論 (Norm Activation Theory)」モデルを踏まえ、環境配慮行動とその規定因の要因連関の一般モデルを提起したものが、広瀬の「環境配慮行動の要因連関モデル」である。広瀬 (1995a-1) は、本モデルについて、環境配慮的行動までの意思決定のプロセスは“「環境にやさしい目標意図」を形成するまでと、「環境配慮の行動意図」を形成するまでの 2 段階に分かれると仮定”し、更に、目標意図と行動意図それぞれに影響する異なる規定因が各々に存在するという 2 段階モデルを示したものである (図 3)。

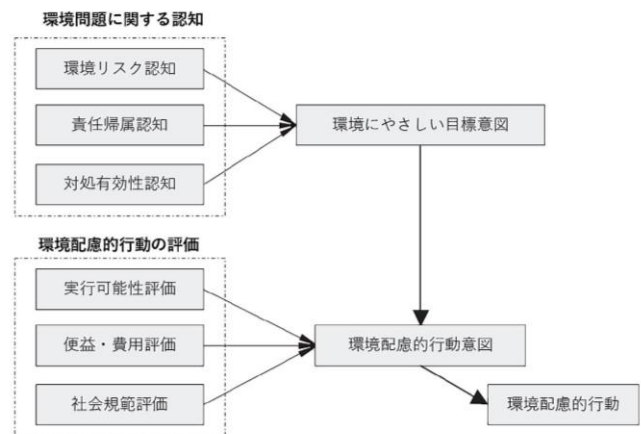


図 3 環境配慮行動の要因連関モデル

広瀬 (1995a-2) の論を参考に以下①②の解説を試みる。

①「環境に優しい目標意図」とその規定因

「環境に優しい目標意図」に影響を与える規定因には、行動を期待する問題に対する 3 つの側面からの“認知”を挙げている。すなわち、「環境リスク」「責任帰属」「対処有効性」の認知である。

「環境リスク」の認知とは危機感と言い換えることができ、被害の深刻さと事態発生の可能性という要素から構成されているという。「責任帰属」の認知とは責任感と言い換えることができ、その問題の帰属が誰又は何によるのかの認知であり、自分自身の責任を認知すれば行動を改めることが想定され、他者の責任を認知すればそれを改善させるための行動に出るだろう。いずれの場合も、責任の程度が強くなればなるほど、環境に優しくという目標意図も強くなる。「対処有効性」の認知とは有効感と言い換えることができ、何らかの対応をすればその問題は解決できるであろうという認知である。自分たちの行動による具体的な改善の姿がイメージできれば有効性感覚は大きくなり、環境に優しい目標意図を抱くが、逆に、改善のイメージが描けず自分たちの力ではどうしようもないという無力感に囚われるとすれば、環境に優しい目標意図を抱けない。

②「環境配慮的行動意図」とその規定因

「環境配慮的行動意図」に影響を与える規定因には、行動を期待する問題に対する 3 つの側面からの“評価”を挙げている。すなわち「実行可能性」「便益・費用」「社会規範」の評価である。

「実行可能性」評価とは、具体的な環境配慮行動をとるためにはそのために必要な知識、技能を身に付けており、行動のための機会が用意されていることが必要となる。例えば、自身が暮らす地域において農産物を通じて持続可能な地域社会を実現しようとした場合、問題の所在とその解決方法の知識、具体的な対応策につながる技能、行動できる場所や団体、仲間等の機会があるかどうかでその実行可能性の評価の高低が決まるということである。「便益・費用」の評価とは、環境配慮行動を実施した場合、これまでの自身の生活にどの程度、便利さや快適さが損なわれ、費用が発生するかという個人的な便益と費用のコスト評価である。このコストが高くなると行動意図は抱きにくくなるというものである。しかし、筆者はここに自身の効用（満足度）を加味する必要性を検討している。伝統文化という文脈で環境配慮的な行動をとった場合にどの程度の自身の効用が高まるのかということであり、その効用とコストが天秤にかけると、行動意図に与える影響が変わってく

る。「社会規範」の評価とは、具体的な環境配慮的行動が所属する集団内の規範や期待に沿っているかどうかという判断である。つまり、規範から逸脱したときの社会的批判、規範に同調したときの社会的賞賛、についての予測が行動の自由度を定めたり、特定の行動をとるよう方向づけたりするというものである。

以上、環境配慮的行動を実行するまでには、初めに3つの側面からの認知を経て中間地点である目標意図を形成し、その次に行動についての3つの側面からの総合的な評価に基づき行動意図が形成される。最終的に環境配慮行動の実行がなされるまでには2つの心理的関門を経る必要があるというモデルを説明した。このモデルは、これまで感覚的、経験則的に企画され、評価されてきたことが多い事業について、認知や評価といった事業企画の際の視点を示唆するほか、目標意図と行動意図という事業の狙いの構造化に資すると思料している。このことから、本論において「環境配慮行動の要因関連モデル」を採用し、各事業の教育効果検証やモデル化の検討に活用することとした。

-4 地域の伝統・文化を体現する「伝統工芸品」

国立青少年教育施設の周辺には様々な伝統文化が存在するが、2023年度及び2024年度は、有形文化財の一つである伝統工芸品に着目し、それらを体験活動プログラム化する実践研究を進めた。伝統工芸品は、地域の自然資源を素材とし、その地域の歴史や文化、自然環境を踏まえ、かつ生活の中で使用する道具を伝承し、或いは、時代の要請により形を変えながら現代に伝えられてきたものである。そうしたことを鑑みると、伝統工芸品は地域の伝統文化として、地域知、伝統知を有するカタチとなって存在しているものであると理解できる。

このことについて、前川（2018）は、伝統工芸が備える要素として“①「伝統」は「歴史性」を示すものとして、②「工芸」は「実用性」を示すものとして整理できる。さらに「歴史性」と「実用性」からは、使い勝手の良いものへと改良を重ねたこと、そこには使用する条件により特徴が生まれたことから「地域性」を導くことが出来る。また同じく「歴史性」と「実用性」からは、使用する場所の気象条件や地理条件によって使い勝手を工夫することや、場所によって特徴の異なる地域に賦存している資源を活かしながら有効に活用する精神から「合自然性」を導くことができる”としている（図-4）。

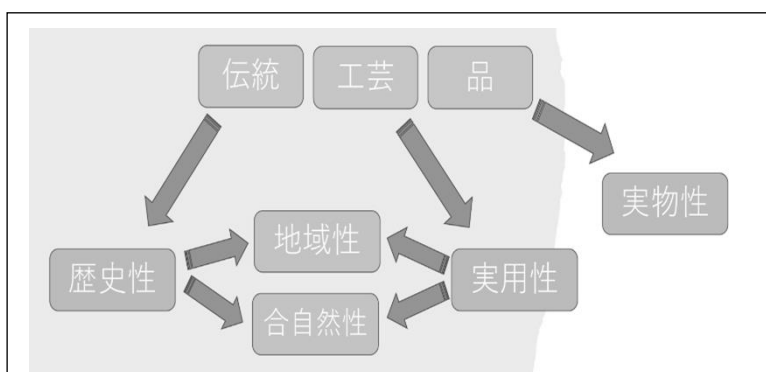


図-4 伝統工芸品が備える要素

前川洋平（2018）、伝統工芸品研究の現状と展望、林業経済 71（6）、pp4-5
を筆者編集

樋口（2023b）によると、“同様に、外山（2004）は、伝統工芸品の現代的課題を整理する中で、伝統的工芸品産業振興協会の伝統的工芸品デザイン研究委員会が提唱する理念について、伝統工芸品の哲学は自然環境への配慮に通ずる、人間尊重の哲学を有し 20 世紀型消費社会への批判、日本文化を表現する格好の素材という3点に整理している。前川や外山らの主張に見られる通り、地域の自然を原料にその地域の生活にあった道具が作られ、利用方法が工夫される中で特徴的な文化が形成され、地域の文化として受け継がれてきた伝統工芸品は、持続可能な社会の概念に通じるものがあると理解でき、伝統工芸を活用した教育活動は、ユネスコが示す ESD の基本構造の指摘に対

応するに足る地域の教育資源であると考え、教育プログラムに取込むことの有効性を期待することが可能である。”と主張していることから、ESD 教材としての有形伝統文化としての伝統工芸品の有用性が推察される。

そこで、本報告書では、2 件の伝統工芸品の体験活動プログラム化に向けた実践研究事例を報告する。1 件目は、国立大洲青少年交流の家（愛媛県大洲市）近隣の愛媛県喜多郡内子町の伝統工芸品である「大洲和紙」である。2 件目は、国立夜須高原青少年自然の家（福岡県朝倉郡筑前町）の立地する筑後地域一帯に広がるハゼノキの実から作る櫨の「和蠟」である。ここで、両伝統工芸を対象としたのは、青少年教育施設立地地域と伝統工芸産地との関係性が認められ、また、移動を伴っても活動可能圏内と判断できるかを基準としたことによる。

大洲和紙については、その生産地が国立大洲青少年交流の家（愛媛県大洲市）近隣の愛媛県喜多郡内子町に存在し、当該施設からの距離は約 18 キロメートル、自動車の移動で約 20 分である。また、すでに施設の体験活動プログラムに大洲和紙を使ったノートづくり活動が存在していたため、この背景を深めることで、当活動プログラムのさらなる価値付けに寄与すると判断した。また、ハゼノキの和蠟については、その原料となる櫨栽培農家が、国立夜須高原青少年自然の家（福岡県筑前町）の立地町内に存在し、重要な素材生産地となっていること、当該地が櫨の和蠟生産地である、うきは市を含む筑後地方として文化的一体性を成しており、地域の伝統文化と歴史的生業を取り上げられると判断した。（図-5、図-6）

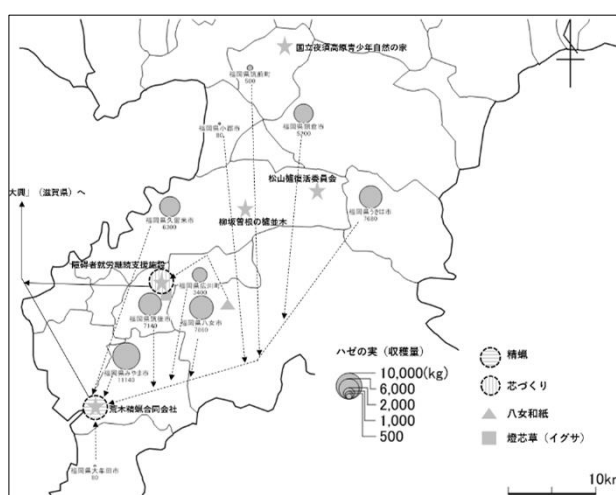
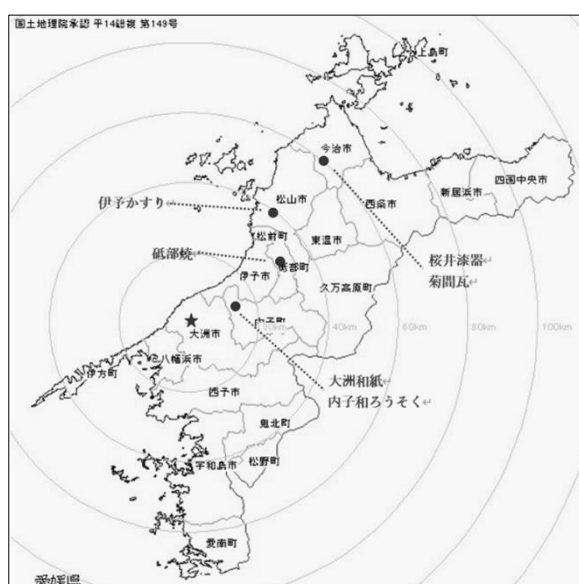


図-5 大洲和紙と大洲青少年交流の家（左）

図-6 櫨の和蠟と夜須高原青少年自然の家（右）

両伝統工芸を体験活動プログラム化する際、伝統工芸の地域における歴史、自然や人との関わり、現在の産業構造等について詳細に把握する必要がある。なぜならば、単なるモノづくり体験ではなく、持続可能な社会の担い手づくりのための体験活動プログラムであるからである。伝統工芸品体験（制作や学習を含む）によって、持続可能な地域社会とはどうあるべきかを考えるためには、現状の背景や課題をプログラムに盛り込む必要がある。

丸谷（2012）は、伝統工芸品の伝統的な制作技法と産地の結びつきを把握し、これらが直接土地と結びついた、自然環境との関係に着目、分析した研究から、“自然との関係を切り離すことで製品の均一性や生産性を求めた立地の自由を手にしたが、伝統工芸は自然から採れる原材料を使用し、伝統的な技法を用いる。したがって、歴史的な土地との結びつきが現存する”ことを指摘し、伝統工芸の原材料を特定し、その歴史的変化を明らかにすることで原材料と産地の結びつきも明らかにす

る研究手法をとっている。本研究においても、青少年教育施設が立地する地域の伝統工芸の原材料を特定し、その原材料が地域の自然と結びついていることを確認し、持続可能な開発のための教育にどのように貢献するのかについて研究を進めることとした。

そこで、産地及び原料となる自然との関係、職人や流通業者や販売業者等関係者に関する情報について、フィールドワークを通じた生の情報収集が必要となる。次項以降では、そもそも地域資源とは何か、地域資源を掘り起こす方法、掘り起こした情報を言語化する方法について報告し、さらにそれらに基づいて企画された実践研究事業について報告する。

2. 地域資源について

地域の伝統文化、伝統工芸品の体験活動プログラム化を考えるにあたっては、地域にどのような教育資源があるのかを認識することから始まる。この教育資源は、「地域資源」に含まれるものであるが、青少年教育施設と地域資源の関係については、樋口（2023b）により、青少年教育施設において伝統的な地場産業体験活動を導入するにあたっての諸概念が検討されている。特に「地域」及び「地域資源」並びに「伝統文化」について整理されていることから、本項は基本的にこれを引用する形で文言の再整理を行った。

- 1 地域について

さて、本研究において「地域」の範囲をどのように定義するのかが大変重要である。今後、全国の青少年教育施設における伝統工芸の活用を検討するに当たり、どのような基準で扱う伝統工芸を選定すべきか、プログラムフィールドの範囲をどのように決めるべきかの判断基準となるためである。また、前項の丸谷の指摘にあるように伝統工芸と地域の自然資源との関係性を関連付けて検討するためである。

地域の定義については、小栗(2010)が参考になる。小栗は「ESD 研究における『地域』との向き合い方」という問いをたて、自身の研究における地域との向き合い方を省察する中で、「地域課題の共有化にむけた働きかけ」から「その土地の風土と生活文化をそこに暮らす人と一緒に掘り起こす」という姿勢へ変化したという。この点は非常に重要である。なぜなら、青少年教育施設職員が地域社会に出向き、そこに暮らす人たちの目線に立ち同じものを見聞きし、共感することを指しているからである。もし、この視点がなければ、地域課題の解決を謳った上から目線の机上の空論となり、地域住民の賛同・協力を得られないばかりか、作成されるプログラムも地域の物語を反映できないからである。小栗はまた、他の様々な研究報告からの検討も試み、地域という言葉の多義性からその扱いの不明瞭性を認めつつ、ESD 研究における地域との向き合い方として、次の二つの共通性を見いだしている。一つは、個別具体的な事象を取扱い、空間との関係性を明らかにしようとするものである。二つは、その場所に存在する自然と、そのかわりを主要な関心事としている点である。

これらを踏まえ、本研究が対象とする地域とは、各青少年教育施設の立地に関係する伝統工芸品が関わる地域であり、自然とのかかわりを踏まえつつ、自然を原料にどのような過程を経て伝統工芸品が生産されるのかという関係性によりまとめられる地域と消費の関係性によりまとめられる空間の二つと定義できる。この視点で個別具体的に整理し、教育プログラムモデルを示すことを試みた。

- 2 地域資源について

一般に「資源」とは、「生産活動のもとになる物質・水力・労働力などの総称」（広辞苑）、「自然か

ら生まれる生産に役立つ要素。広くは産業のもととなるもの。産業を支えているものをいう。地下資源・水資源・人的資源・観光資源など。」(大辞林)等と規定されている。

しかし、永田(1988)は、「地域資源は資源の一部とはいえ、やはり一般的な資源概念で説明できない側面をもっている」ことを主張し、地域資源が有する特徴について、「非移転性」、地域資源相互間の「有機的連鎖性」、「非市場性」を挙げて地域資源の概念を明らかにしている。私たちが青少年教育施設の特色を検討する場合、当地の地域資源にかかるこの3つの特徴を踏まえて検討することは、明確な検討基準を得ることとなるため、非常に有用である。この3つの特徴について、事例を用いて解説する。

「非移転性」とは、その地域から切り離してしまったら意味を失うということである。海や山、川、森といった物理的な対象だけでなく、文化や歴史、生業とつながり、その地域にあってこそ価値を輝かせることを指す。

例えば、水と農産物。清冽で冷たい湧き水を使い、地元産の大豆を原料に伝統的製法で作る豆腐屋が森の中に流れる小川のほとりにあるとする。そこであなたは、豆腐職人夫婦とにこやかに会話し、差し込む森の木洩れ日の優しさを感じ、背後には小川の水と森の木の葉が風に揺れる音を聞く。この時、豆腐という商品は、その地の自然とそこに暮らす人、受け継がれた伝統が一体となって意味をなしている。したがって、話題の豆腐だからといって豆腐のみを地域から切り出して都市部のスーパーで売り出しても、その意味全体を届けることはできない。つまり、その場所、その時、その人でしか再現できない。これが非移転性である。

次に、「有機的連鎖性」であるが、ある一つの製品やサービスは、複数の地域資源の要素が複雑に絡み合っていて、どれか一つでも欠けたら、その製品やサービスが成立しないことを指す。先ほどの豆腐屋の例でいえば、湧き出る清冽な水がなくなったら、当地の湧き水で作る豆腐という意味を失う。地元産大豆をやめて輸入に切り替えたら、地場大豆を原料とした意味を失う。豆腐職人夫婦がいなくなったら手作りの伝統製法の豆腐という意味を失い、森が切られたら山奥の木洩れ日の豆腐店という意味を失う。つまり、これらの要素どれ一つが欠けてもこの地の豆腐の意味を失い、たちどころに魅力を失ってしまう。つまり、水、大豆、人、森という各々の要素がつながりあって初めて特徴的製品が出来上がっていることを表している。

最後に、「非市場性」であるが、非移転性にも通じる点がある。いわゆる規模の経済性が働かないということである。その地の自然と人と伝統文化が生み出す製品やサービスが原資であるため、その量的限界がある。それを超えて市場のニーズに対応して生産しようとすれば、工場生産となり、大量生産の採算をとるために原料を変え、職人の技も不要となり、自然の美しさとも切り離されてスーパーに並ぶことになる。その時点

でもはやその地に根付いていた豆腐ではなくなっている。つまり、市場での大量展開には無理があるのである。

さて、ここまで地域資源の3つの特徴を説明してきたが、では、実際の地域資源の要素はどのように見極めればよいのかという問題があ

表-1 地域資源分類表

1次区分	2次区分	内容
1. 本来的地域資源	イ 潜在的地域資源	①地理的条件-地質、地勢、位置、陸水、海水 ②気候的条件-降水、光、温度、風、潮流
	ロ 顕在的地域資源	農用地、森林、用水、河川
	ハ 環境的地域資源	自然景観、野生生物を含む保全された生態系
2. 準地域資源	ニ 付随的地域資源	間伐材、家畜糞尿、農業副産物等、山林原野の草
	ホ 特産的地域資源	山菜等の地域特産物
	ヘ 歴史的地域資源	地域の伝統的な技術、情報等

る。そこで、農村金融研究会の「農村集落構造分析調査報告書」(1984 年)を参照し永田がまとめた分類表が参考になる(表-1)。

それによると、地域資源は「本来的地域資源」、「準地域資源」に分けられ前者はヒトが自然に働きかけを行う際の対象であり、後者はヒトの活動の結果、本来的地域資源から産出されるものであるという。本来的地域資源は、地理的、気候的条件や土地利用、景観や生態系といった形ですでに可視化されているものが多い。一方で、準地域資源は、生産物や特産物、歴史的な価値や情報など、一見して認識できないものが少なからず存在する。だが、これらは、伝統文化の源泉を地域資源に見ていることから大変重要である。そのため、例えば施設周辺の地誌、風土記、伝聞、伝承などを収集して整理することが求められる。

こうした地域資源の具体的な分類を各青少年教育施設における地域資源検討の基準として活用することは、当該施設の職員や地域に存在する暗黙知の形式知化にもつながることが期待される。地域資源について、分類表を活用して言語化することは重要な作業であるが、その元となる情報(精度の高い地域資源像)をどれだけたくさん集められるかにかかっている。次項では、情報の収集について報告する。

3. 地域資源の言語化から伝統文化体験プログラムへ

－1 地域資源の言語化の必要性

地域の伝統文化体験プログラムを検討するためには、その地域にどのような伝統文化が存在し、それは地域の自然やそこに暮らす人々とどのような関わりがあるのか、そして、どのような歴史を歩んできたのかを知る必要がある。これらの情報の多寡により、出来上がるプログラムの質、深み、魅力が左右されるからである。そうして出来上がったプログラムは地域独自の魅力にあふれたものとなり、提供する青少年教育施設の特色化、魅力向上にも寄与することが想像される。

ともすれば、その事業の対象地域の魅力について「なんとえば良いかわかりませんが、なんか良いんですよ」とか、「来て見てもらえれば良さがわかりますよ」とか、又は「特にこの地域に特筆すべき事も物もないのですが」などと言っておられる事業担当者や施設職員等もいるかもしれない。しかしそれは地域にとって魅力を形にする機会、その事業化機会や青少年にとっての体験の機会を大きく失っていることに等しい。

その地域には、現在まで重ねてきた歴史や文化、海山森川等の自然、そこに暮らす人々の知恵に裏打ちされた文化といった「何か」、つまり、価値（宝）が必ず存在している。それを信じて事業企画、プログラム検討を行うことで、訴求力がある質の高い伝統文化体験プログラムが出来上がる。

前項では、地域資源の検討を行う際の視点をまとめたが、ここで見いだされた地域資源をしっかりと言葉で表現することで、地域資源という情報は、自身の内部にのみ存在する暗黙知ではなく、誰もが理解し共有できる形式知となる。この形式知化した情報こそがプログラム検討の際の宝の山なのである。であるからこそ、地域資源の言語化は大切なのである。本稿で取り上げる実践研究事業では、地域資源の認識から言語化を経てプログラムデザインを行った。本項では、地域資源の言語化についての手順をまとめてゆく。

－2 ストーリーテリング、情報と情報のデザイン

地域の伝統文化を体験するプログラムを企画するためには、地域資源の言語化が重要であることを述べてきた。それは、企画のスタートが地域資源の認識にあるからである。そして、地域資源を認識した後、これらをどのように組み合わせて意味を作り上げるかが大事になる。組み合わせて出来上がるものが物語（ストーリー）であり、その物語をつくり他者に語ることをストーリーテリングという。ストーリーは他者に語るとともに自身にも語ることとなり、プログラム企画のための基礎を築くことになる。ここでは、ストーリーテリングの要素を情報、情報のデザインという視点からまとめ、その作業方法を提示したい。

（1）記号というデータを情報に変え、物語を紡ぐ

自分の足で地域内を歩き回り、心を揺さぶりつつ、目や耳で地域の世界を吸収することからストーリーテリングは始まる。そこで吸収して集めたひとつひとつの情報は、単なる情報ではなく、むしろデータと認識してほしい。これらのデータは、それ自体ではただの記号に過ぎず、単独ではそこに意味が宿らない存在だ。ところが、データが組み合わされ、連なり、秩序を与えられたとき、初めてそこに意味が生じる。それが情報と呼ばれるものの本質だと定義しておきたい。

作り出した複数の一塊の情報たちはその単体では最小限の意味しか持たない。しかし、それらがつながりを持ち始める瞬間、初めてその間に新たな意味が見いだされ、情報が生命を帯びる。こうして生まれた情報が結びつくことでセンテンスが生まれる。センテンスは互いに絡み合い、響きあい、更なる繋がりを求めて広がってゆく。

新たに生みだされたセンテンス同士は、組み合わせられ、並べられながら、文章という一つのまとまりへと進化する。そして、この文章は、単なる文字の集合体ではなく、そこに感情や思想が宿ることで、初めてストーリーとしての形を成す。ストーリーは読む者の心に訴えかけ、想像力を掻き立て、その奥深い世界へと誘う役割を果たす。

このプロセスは、無数のデータが意味を持たない符号から、意味深い情報へと転換され、さらに情報がつながり、形を成してストーリーへと昇華してゆく、思考という創造の旅なのだ。それはまるで、点と線が結びつき、複雑で美しい絵を描き出す過程に似ている。最終的に生まれるストーリーは、個々のデータが持つ可能性を最大限に引き出した結果であり、その根底には創造の力と人間の知恵がある。このプロセスこそが情報の編集なのである。データから情報へ、情報からセンテンスへ、センテンスから文章へ、各々の段階で編集が行われているのだ。そうした観点を意識して検討を進めることをお勧めする。

ここまでをまとめると・・・

- データ**：計測数値や観察結果などの未加工の生の情報で、これ単体では意味を成しません。
- 情報**：編集や解釈を経て意味を持つようになったデータまたはデータの集合です。
情報は具体的な知識や判断を支える材料となります。
- 編集**：データや情報を並べなおして整理したり、加工を加えて目的に沿って相手に何かを伝えるためのコンテンツを創り出す作業です。
- 物語**：編集した情報で構成されたものであり、物語を読んだ人の感情や興味を引き起こすコンテンツ。ストーリー。

図-7 データから物語までの流れ

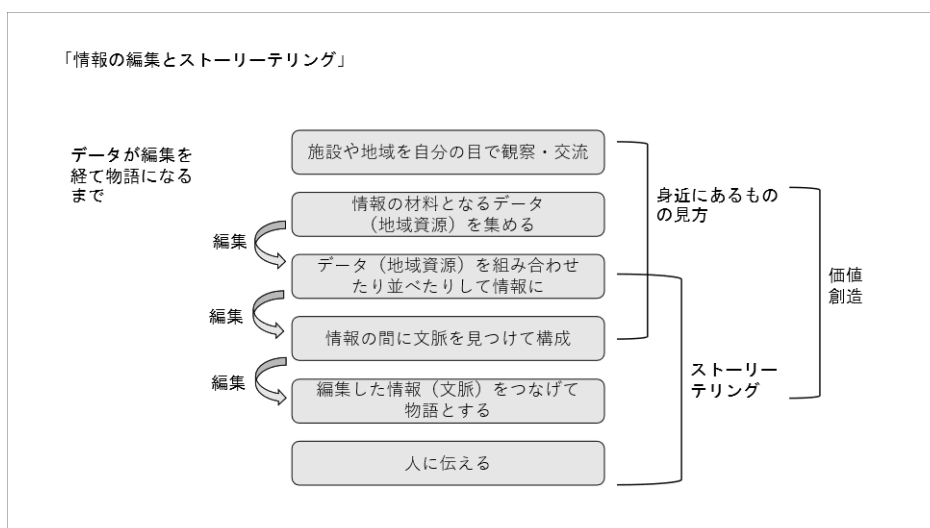


図-8 情報の編集とストーリーテリング

-3 ストーリーテリングから事業へ（事例）

本項では、心を引きつける魅力的な地域のストーリーがいかに事業の基盤となり得るかを探った。福岡県筑後地域の櫨の和蠟、愛媛県内子町の大洲和紙の事例を通して、その可能性を紐解く。これらは、書籍や論文、地域誌といった文献調査、現地での実地踏査、さらには関係者へのインタビューなど、丹念な情報収集の成果によって生み出したものである。まるで糸を撚り合わせて布を織り上げるように、収集されたデータを情報、文脈、そして物語へと昇華させ、地域の価値を新たな形で輝かせたと考えている。

（1）福岡県筑後地域のハゼノキと櫨の和蠟

筑後地方は、温暖で湿潤な内陸型の気候区に属し、ハゼノキ栽培に適した環境を有しています。耳納山や高良山をはじめとする山々から流れる河川が筑後川へと注ぎ込み、豊かな水源がこの地域の農業や伝統的な栽培活動を支えています。平地では水田や畑が広がり、水路沿いや河川の土手にはハゼノキが植えられ、人々の暮らしの中で風景の一部として溶け込んできました。この地域環境は、江戸時代から続く櫨の和ろうそくの原料であるハゼノキ栽培を支える要因となってきました。



図-9 柳坂曾根の櫨並木の様子（久留米市内・夏）

福岡県筑後地方、朝倉郡筑前町にある国立夜須高原青少年自然の家。この地は、江戸時代から続く伝統産業である櫨の和ろうそくの原料であるハゼノキの実生産が特色の一つとして挙げられます。和ろうそくは、その美しさだけでなく、地域の自然と文化、そして人々の暮らしと深く結びついてきた産物です。その原料である木蠟は、ハゼノキの実を加工して作られるものであり、ハゼノキの並木は、人々の生活の景観にも溶け込みながら受け継がれてきました。並木は、伐採などによって一時劇的に数が減少したものの、現在も栽培が続けられています。ハゼノキと木蠟が持つ文化的価値と実用性は、地域の伝統産業として現代にも

受け継がれ、新たな可能性を生み出しているのです。

木蠟の歴史を紐解くと、仏閣で使用された蠟燭にその起源を見いだすことができます。後に髻付けや膏藥などの用途に広がり、様々な場面で人々の生活を支える素材として活用されました。近年では、自然志向の高まりを背景に、木蠟の需要が国内外で増加し、その用途はますます拡大しています。筑後地方は、温暖で湿潤な気候を持ち、ハゼノキ栽培に適した環境です。耳納山や高良山をはじめとする山々から流れる河川が筑後川へと注ぎ込み、平地では水田や畑が広がっています。その沿岸ではハゼノキが植栽され、地域の景観を構成しています。福岡県の「ハゼ現地調査」(平成 28 年～平成 30 年)によれば、最も多い植栽場所は道路沿いであり、畑や原野・雑種地、そして水辺にわたる多様な環境で確認されています。

福岡県は明治から大正にかけて全国最大のハゼ栽培地となり、明治 40 年頃には県内に約 390 万本ものハゼノキが存在していました。明治 43 年の統計では全国の生蠟生産量が 7,200 トンに達し、そのうち福岡県は約 4 割にあたる 2,800 トンを生産していました。この木蠟は、和ろうそく製造を支える重要な原料として、多くの地域で利用されていたのです。しかし、生蠟の需要減少に伴い、ハゼノキの伐採が進み、現在では約 7,000 本しか残されていません。製蠟所もピーク時には福岡県内に 613 軒が存在していましたが、現在ではみやま市の「荒木製蠟合資会社」1 軒のみが存続しています。

かつての筑後地方は和ろうそくの産地としても栄えており、特にうきは市吉井町では、「ろう屋」や「ろうそく屋」と呼ばれる家々が軒を連ねていました。吉井町誌(1979)には、これらの家が櫛の実から木蠟を搾り出し、蠟燭を製造していたことが記されています。また、櫛蠟燭の製造と販売によって財を成した者も現れ、その蓄財は「吉井銀(よしいがね)」と呼ばれ、地方金融において大きな影響力を持っていました。大正時代には、職人たちが蠟鉢から蠟を掬い芯に塗り重ねる光景が街中で日常的に見られ、子どもたちが学校帰りにその技を眺める姿が記録として残されています。このような繁栄の跡は、うきは市にある「居蔵の館(旧松田家住宅)」に今も残されています。



図-11 往時の賑わいを今に伝えるうきは市吉井町の様子

燭燭の灯りは時代とともに衰退していったものの、その炎の揺らめきは途絶えることなく、現在も日本各地に受け継がれています。樋口（2023b）による調査では、2022年時点で全国の1府10県で13種類の和ろうそくが製造されていることがわかっています。その中でも、特に九州産の燭の生蠟は、和ろうそくの製作に欠かせない存在とされています。滋賀県の「有限会社大興」の職人、大西明弘氏は、九州産の燭の生蠟を使用することへの強いこだわりを示しており、成安造形大学付属近江学研究所（2013）のインタビューでその質感や炎の揺らめきが他には代えがたいと語っています。また、和ろうそく製作に欠かせない燈芯の材料であるイグサも福岡県柳川市の農家から取り寄せていることも述べられています。



図 12 燭の和ろうそくの灯

燭燭の材料となる燭の実やイグサは、地域の自然や文化と深く結びついて絡み合っており、永田恵十郎（1988）が指摘する「有機的な連鎖性」が地域の価値を高めているとみることができます。もし、その連鎖が断たれれば、復活は非常に困難になると予想されます。一方で、この伝統文化を未来へと繋ぐ活動も行われています。「松山燭復活委員会」（代表：矢野眞由美氏）は、ワークショップや新商品の開発を通じて燭燭の魅力を伝える活動を展開しており、伝統を再び地域に根付かせる努力を続け、矢野（2015）の「燭の道」にその軌跡をたどることができます。

筑後地方を起点とした燭燭の物語は、地域資源を活用した事業の可能性を示す象徴であり、伝統文化を未来へ繋ぐ希望の灯りともいえるのではないのでしょうか。地域の自然、文化、人々の技術が織りなすこの物語は、日本全国、さらには海外にまで広がり、新たな価値を創造する光として輝いています。燭燭の炎が照らし出す未来、それは読者皆様の各地域での新たな挑戦を後押しする一筋の光かもしれません。

※上記の文章は、樋口（2023b）p.p.63-65の「IV関連用語の諸相整理結果を用いた地域資源としての伝統工芸の言語化の試み」の内容に追記修正を加えて再編のうえ記載した。詳細の情報を省いている箇所もあるため、興味のある方は出典元を参照して頂きたい。

(2) 愛媛県喜多郡内子町の大洲和紙

四国山地の緑深い森に抱かれた内子町。愛媛県西部の内陸部に位置し、その面積の約8割を山林が占める中山間地域です。町を訪れた瞬間に目に飛び込んでくるのは、木々と小田川が織りなす四季折々の表情、そしてその豊かな自然に寄り添う人々の暮らしの営みです。ここでは、長い歴史と自然が溶け合い、他のどこにもない風景が広がっています。

町の中央を流れる小田川。肱川の支流であるこの清流が、内子町の歴史と発展の中心的な役割を果たしてきました。内子地区、五十崎地区、大瀬地区、小田地区の4つの地区に分かれるこの町では、小田川沿いに盆地を中心とした市街地が形成され、段丘には果樹園や水田が点在しています。また、小田地区は標高600mを超える山林が広がり、清らかな溪谷美を抱く小田深山では、原生林が地域の誇りとして守られています。こうした豊かな自然環境は、大洲和紙や木蠟といった伝統工芸の発展を支える要となりました。小田川の伏流水や地下水が、これらの製造に欠かせない上質な水を提供してきたのです。



図-13 大洲和紙を漉く職人の様子

内子町は、江戸時代に在郷町としての地位を確立し、製紙業や製蠟業の発展を背景に繁栄しました。その歴史は今も街並みに刻まれています。内子・五十崎地区には、製紙や木蠟の生産により形成された歴史的建造物群が残され、これらは「在郷町内子・五十崎にみる歴史的風致」として高く評価されています。この風景は、かつて農村部の商品生産拡大に伴い発展した商工業の活気を今に伝えています。

そして、この町が誇る伝統的工芸品のひとつが「大洲和紙」です。五十崎地区に残る工房では、地域の山林で栽培された楮（こうぞ）や三桠（みつまた）といった和紙の原料が古くから活用され、職人たちによる手すき和紙の技が現代にも受け継がれています。その品質の高さから書道半紙としても広く知られ、繊細な手仕事の妙が一枚一枚に込められています。

もうひとつの代表的な伝統工芸品が「和蠟燭」であり、こちらは福岡県から仕入れた燭の生蠟を用い、内子地区の工房で代々受け継がれてきた手掛け技術で作られています。約200年の歴史を持つ和蠟燭は、職人の手で一本一本丁寧に仕上げられ、その温かな灯りは、日常の中に特別な趣を添えています。

現在、大洲和紙と和蠟燭を製作する工房はそれぞれ1軒ずつとなり、厳しい課題にも直面しています。それでも、職人たちは受け継がれてきた技術を継承しつつ新たな可能性を模索しています。こうした取り組みは、内子町の自然と伝統文化は次世代へ繋げる希望の象徴となり、訪れる人々に感動と学びを提供し続けています。

内子町は、過去と未来を繋ぐ橋のような場所です。四国山地の自然が息づくこの町で、大洲和紙や和蠟燭を通じて見つけられるのは、人々の努力と創意が紡ぎ出す物語です。内子町の美しさと温もり、そしてその奥深い魅力をあなたもぜひ感じてみてください。

※上記の文章は、樋口（2024b）p.p.25-66の「5.（3）地域資源と愛媛県内子町における地域資源としての大洲和紙の言語化」の内容に追記修正を加えて再編の上記載した。詳細の情報を省いている箇所もあるため、興味のある方は出典元を参照していただきたい。



図-14 山林に自生するコウゾ（楮）

4. 研究実践事業報告

－1 櫨の和ろうそく（福岡県）

（1）事業概要

福岡県が世界に誇るハゼノキから生まれる生蠟(きろう)を使った伝統工芸品『櫨の和ろうそく』づくりを体験する場と機会を提供する事業として「櫨の和ろうそくづくりワークショップ」を2024年3月23日(土) ①10時～12時、②13時30分～15時30分、九州大学芸術工学研究院大橋キャンパス内（工作工房3階造形教室）を会場に開催した。主管は九州大学大学院芸術工学府朝広研究室、主催は国立青少年教育振興機構の実施体制で行った。参加者は、午前の部14名、午後の部17名の合計31名であった。当事業の体験を通じ、県内産の材料を用いて作られる伝統工芸品の美しさに触れる機会を創った。なお、蠟燭を入れる器には久留米の「耳納焼き」を用意した。また、櫨の石鹸も作ることで地域の魅力に触れる機会とした。

福岡県内には櫨並木等美しい景観が残されており、この景観を創り出すハゼノキからの贈り物の一つが『櫨の和ろうそく』である。この特別な蠟燭は、地元のハゼノキから取れる生蠟(きろう)を使用し、灯芯には八女和紙や筑後市のイグサが使われている。当ワークショップは、福岡の自然と伝統技術が融合して、美しい和蠟燭が生まれ、文化と歴史の一端を担ってきたことを体験的に学ぶ機会を提供し、かつ、その成果効果を明らかにすることを目的として実施した。

①プログラム

プログラムを構成する活動プログラム（アクティビティ）は、1）櫨の生蠟からキャンドルを作る実践的活動、2）ハゼノキや櫨の和蠟燭の特徴や歴史を学ぶ座学、で構成した（表-2）。分析の対象とはしていないが、そのほかに活動の最後に石鹸づくりも行った。なお、午前及び午後の各々のワークショップは、活動単位の構成順序の異なったプログラムとし、その違いによる教育効果の差異に焦点を当てた分析を行った。質問紙調査は、事前、中間、事後の3時点で行うことで、活動ごとの効果、組み合わせ別の効果をそれぞれ検証することとした（表-3）。

表－2 ワークショップアクティビティ構成と質問紙調査

	事前質問紙 調査	アクティビティ 1	中間質問紙 調査	アクティビティ 2	事後質問紙調 査
午前の部		櫨キャンドルづくり		櫨に関するミニ講義	
午後の部		櫨に関するミニ講義		櫨キャンドルづくり	

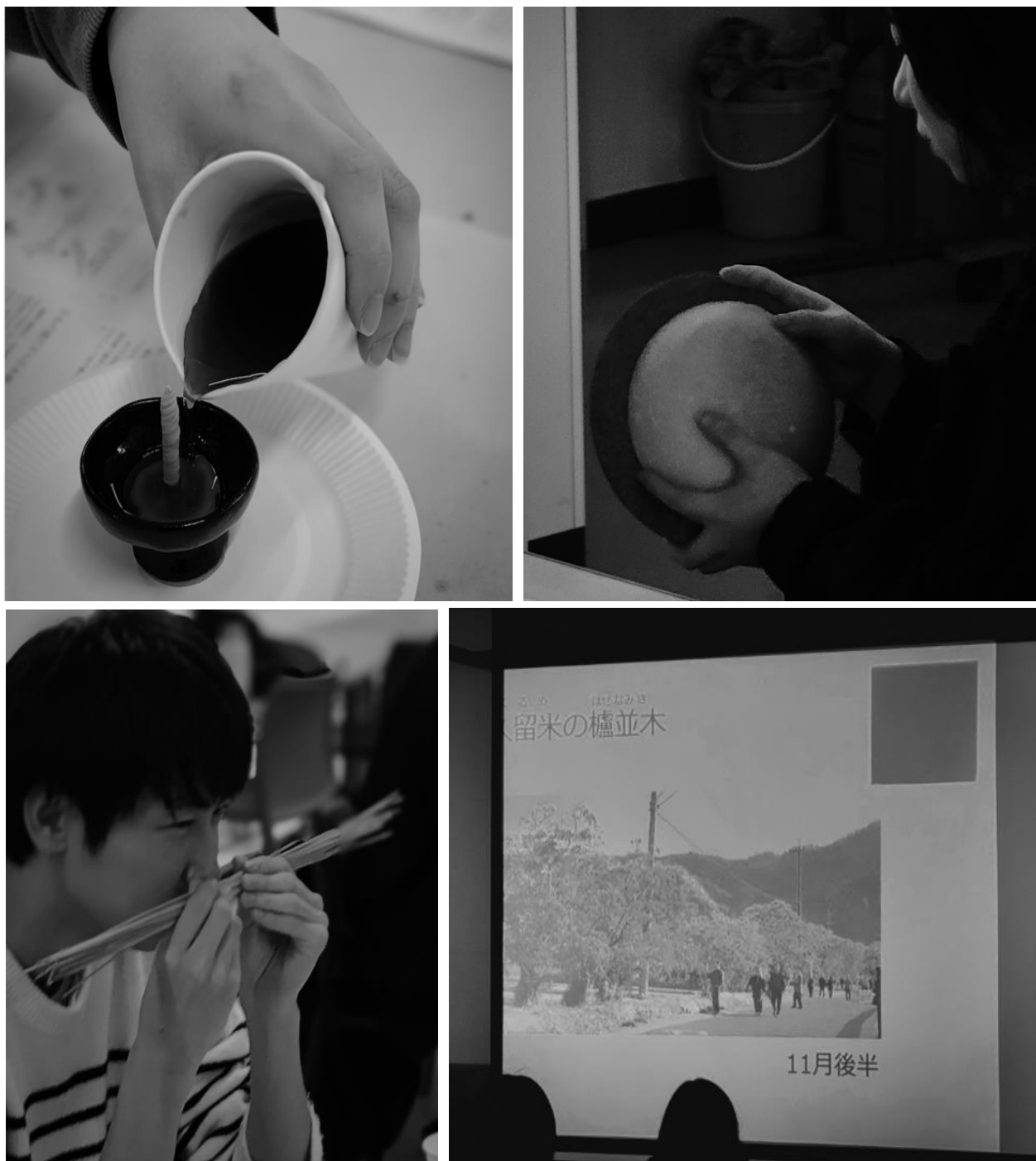


図-15 櫓の和キャンドルづくりワークショップの様子

左上：耳納焼きに立てた和蠟の芯と和蠟を流し込んでいる様子

左下：芯の材料の一つイグサを体感している様子

右上：和蠟の塊を体感している様子

右下：ミニ講義の様子

表-3 調査票の質問と項目属性

項目属性	質問	事前	中間	事後	回答選択肢
【属性確認】	Q1.あなたの年齢層を選択してください	○			10,20,30,40,50,60,70代以上
	Q2.あなたの職業を選択してください	○			学生、社会人、その他
【前提認識】	Q3.ハゼノキとその姿・景観を知っていますか	○	○	○	知っている、知らない
	Q4.福岡の伝統工芸品・櫛の和ろうそくを知っていますか	○	○	○	
	Q5.伝統工芸が北部九州の地域の文化・景観を創っていることを知っていますか	○	○	○	
【目標意図】	Q6.次の①～⑥のことについて、①②は各々に4つの評価を、③～⑥はあなたの考えを聞く質問を示しています。当てはまる数字又は項目に○をつけてください。 【目標意図】 ①地域の伝統工芸品への支援をしたいと思う ②地域の自然環境保全活動をしたいと思う	○	○	○	【5段階リッカート尺度①】 愚かなこと-1-2-3-4-5-賢いこと 悪いこと-1-2-3-4-5-良いこと 損失がある-1-2-3-4-5-利益がある 非難される-1-2-3-4-5-褒められる
	【リスク認知】 ③ハゼノキの減少で地域の伝統文化が消失している ④伝統工芸の消失で地域の自然と人のつながりが消失している	○	○	○	
	【責任帰属認知】 ⑤伝統工芸や地域自然資源の減少は地域住民の無関心による	○	○	○	
	【対処有効性認知】 ⑥伝統工芸に関与することで伝統文化と地域の自然・景観を保全できる	○	○	○	
【行動意図】	Q7.次の①～④のことについて、各々に8つの質問を示しています。それぞれについてあなたの考えの程度にあてはまるものに○をつけてください。 ①伝統工芸品を購入する等し自分の生活に取り入れる ②伝統工芸品の産地を訪れたり生産者と関わる ③ハゼノキやその景観を保全する活動に参加する ④地域の伝統文化や自然の良さを広める	○	○	○	【5段階リッカート尺度②】 とても思う、思う、どちらともいえない、思わない、全く思わない
	【行動意図】 Q1.今後自分は実施すべきだと思う。 Q2.今後自分も実施すると思う。 【実行可能性評価】 Q3.実行に必要な知識や技術を持っている Q4.実行に必要な機会を持っている 【便益費用評価】 Q5.実施するのは面倒だ (R) Q6.実施すると自分に不利益が生じる (R) 【社会規範評価】 Q7.周囲の人は実施していると思 Q8.周囲の人は自分に実施してほしいと思っている				
【愛着形成】	Q8.次のことについてどのように考えますか？ ①同じ地域に住む人同士の絆は大切である ②地域のことをもっとよくしたいと思う ③地域のために頑張っていきたいと思う ④この地域の住民(隣接県)であることに誇りを感じる	○	○	○	【5段階リッカート尺度②】 とても思う、思う、どちらともいえない、思わない、全く思わない
【活動評価】	Q9.今回のワークショップの各活動を通じてあなたが感じたことについて教えてください。 ①「和ろうそくづくり」について ②「ミニレクチャー」について ③「石鯰づくり」について			○	【5段階リッカート尺度②】 とても思う、思う、どちらともいえない、思わない、全く思わない
	④楽しく体験できたと思う ⑤地域の伝統工芸・自然環境、文化について興味が湧いたと思う ⑥新しい発見や学びを得られたと思う			○	
	Q10.今回のワークショップの各活動を通じた全体的な満足度はいかがでしたか。			○	【5段階リッカート尺度③】 とても不満、不満、どちらでもない、満足、とても満足

(2) 結果

この事業の教育効果の測定は、各参加者への質問紙調査を3時点（事前：開始前、中間：1つ目の活動体験後、事後：2つ目の活動体験後）において、取得したデータを統計分析することで行った。なお、表-2のとおり、午前の部は実践的活動を先に行い、理論学習を後にする構成とし、午後の部は、理論的学習を先に行い、実践的活動を後に行う構成にしている。質問紙は[属性確認(事前のみ)][前提認識][目標意図][行動意図][愛着形成][活動評価(事後のみ)]の大項目群に分類する10問56項目で構成した。質問紙の構造は、広瀬(1995a)を参考に、各活動が目標意図を醸成し、それが行動意図を喚起し、具体的な行動につながるという二段階モデルを設定した(図-16)。目標意図は地域の「伝統工芸品

への支援」や「自然環境保全活動への参加」について、行動意図は地域との関わりを想定した4つの具体的な行動について、各々5段階評価で各項目の平均値を合成得点として算出した。愛着形成は、酒井(2016)の尺度から「住民であることの誇り」に関する4項目を使用し、活動評価は、各活動について「楽しく体験できた」「興味が湧いた」「新しい発見があった」の3項目と総合満足度を5段階評価で測定した。

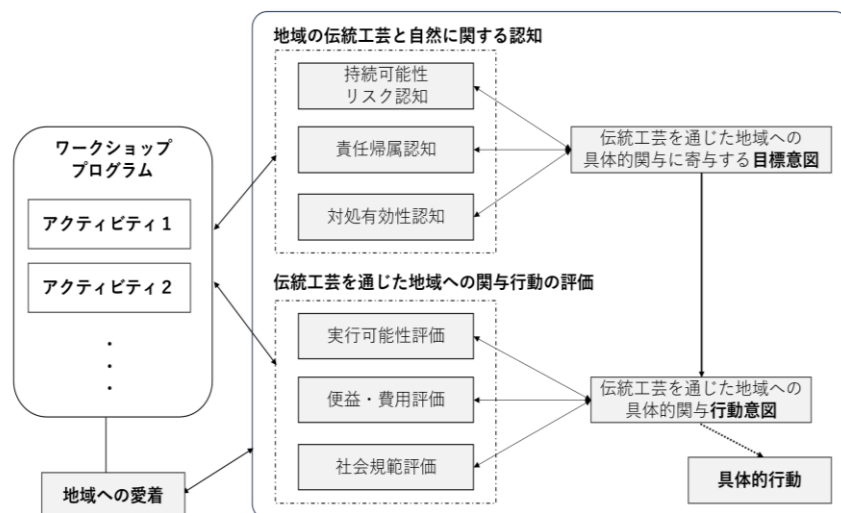


図-16 櫓の和ろうそくづくりワークショップによる効果仮説構造図

なお、統計分析は、清水祐士(2016)による HADon18 を使い、ウィルコクソンの符号付順位検定により、分析した。結果は次頁図-17 及び次の通りであった。

①「前提認識」の変化

当項目属性の全ての質問項目で午前の部、午後の部ともにワークショップ前後で有意に向上し、その効果量が大きかった。

②「目標意図」の変化

「地域の伝統工芸品への支援」について、午前の部は事前-中間、事前-事後で有意に向上、午後の部も事前-事後で有意に向上した。一方、「地域の景観・自然環境保全活動」に対する意欲は、午前の部の事前-事後のみで有意に向上した。

③「行動意図」の変化

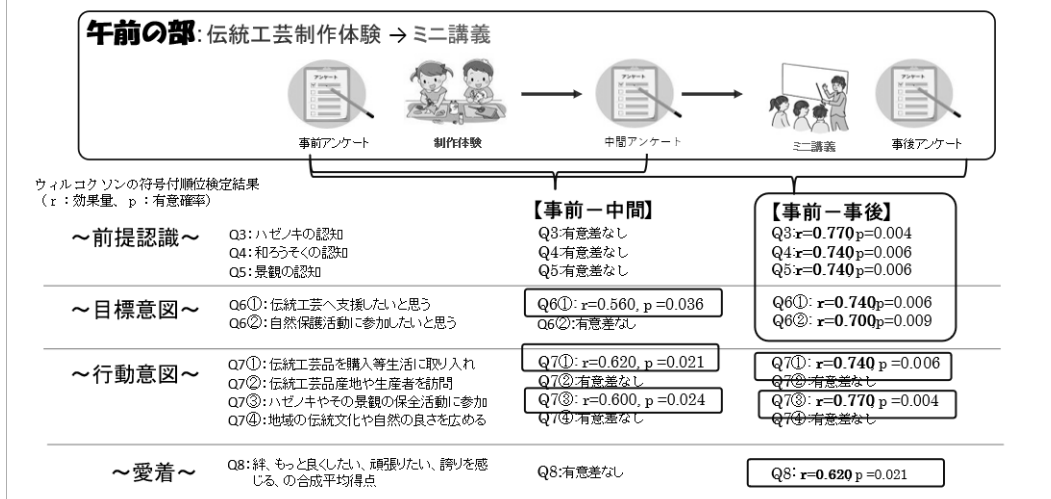
4つの具体的な行動意図に関し、午前の部は「伝統工芸品を購入…」、「…景観を保全…」で事前-中間、事前-事後で有意に向上した。午後の部では事後で「伝統工芸品を購入…」と「…景観を保全…」で有意に向上した。

④「愛着形成」の変化

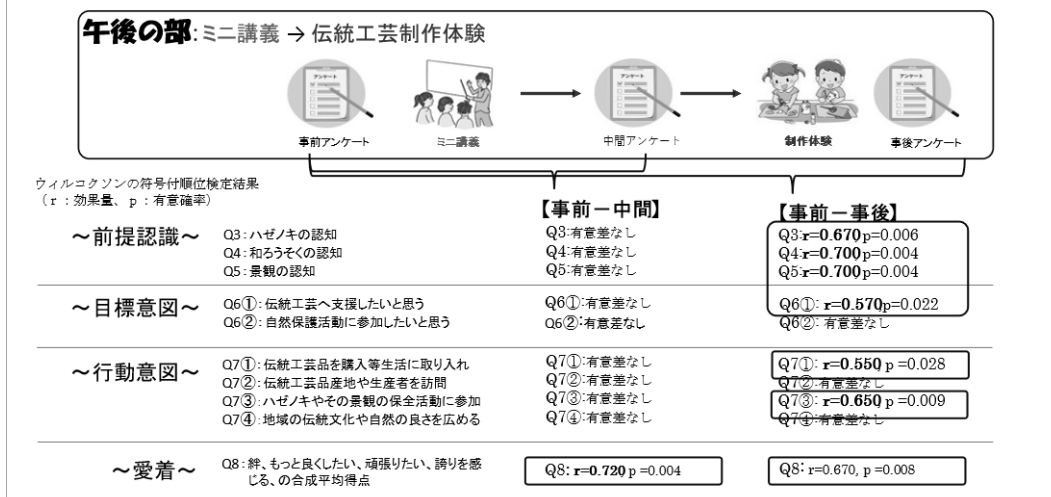
午後の部は事前-中間で有意に向上し、事前-事後では午前の部、午後の部ともに有意に向上し、効果量も大きかった。



質問紙調査分析結果 ～ 午前の部:制作体験 → ミニ講義 ～



質問紙調査分析結果 ～ 午後の部:ミニ講義 → 制作体験 ～



調査結果からの考察と課題 ～ 考察 ～

- 前提認識は、午前/午後両方で同様の効果が 見られ、どちらの活動も認知向上効果があることが示唆された。
- 目標意図は、午前は伝統工芸品への支援意欲において、ワークショップ初期で効果を発揮した。事後では、両群ともに有意な向上が見られたが、午後は午前に比べて効果量がやや小さかった。
- 行動意図は、「伝統工芸品を購入等生活に取り入れ」「景観を保全」に対し、午前は中間と事後で有意差を示し、事後に有意差を示した午後と比較すると効果量が大きかった。
- 愛着形成は、午前と午後両方が最終的には有意差を示したが、午後の方が初期段階で有効性を示した。午前はミニ講義による理論学習を経ることで地域に対する愛着形成の効果を示すと推察した。

地域資源である伝統工芸等に関するものづくり等の 実践的な活動と地域の歴史や文化を背景とした 理論的な学習を片方ではなく 組み合わせ



「前提認識」「目標意図」「行動意図」「地域への愛着」の向上には有益であることが示唆され、



特に 実践的な活動を先に行う構成としたプログラムの方が効果を最大化することができる可能性がある

☞ 各地の歴史的・文化的景観とそこに紐づく文化の継承・保全が多く市民参加を得て展開されることを期待

図-17 調査結果の図解と考察のイメージ

(3) 考察

参加者の前提認識（地域資源であるハゼノキやその生産物、景観・関連文化についての認識）は、午前の部および午後の部の両方で有意に向上した。特に、午前の部（櫨ろうそくづくりが先）と午後の部（ミニ講義が先）の両方で同様の効果が見られ、どちらの構成も認知向上効果があることが示唆された。

目標意図は、午前の部は伝統工芸品への支援意欲において、ワークショップ初期で効果を発揮した。事後では、午前の部、午後の部ともに有意な向上が見られたが、午後の部は午前の部に比べて効果量がやや小さかった。従って、午前の部の構成の方が目標意図の変化においてより強い効果を示す可能性が示唆された。

行動意図も、午前の部は高い効果量を示し、「景観を保全」に対し午前の部の効果量が大きく、ワークショップ初期段階で影響を発揮していたことから、実践的な活動を初めに行う午前の部の構成の方が具体的行動意図においても強い効果を示す可能性が示唆された。

愛着形成は、午前の部と午後の部の両方が最終的には有意な向上を示したが、午後の部の構成の方がワークショップ初期段階で高い有効性を示した。一方で午前の部も最終的に有効性を示したことから、午前の部の構成はミニ講義による理論学習を経ることで地域に対する愛着形成の効果を示すと推察した。

本調査結果から、午後の部の構成（実践的活動から理論的活動に展開するパターン）の有意性が目立つ。そこで、午前の部のワークショップ構成がどのように持続可能な担い手育成にかかわるのか、以下により考察を進める。

- ①初期関心の喚起:実践活動が参加者の関心を引き出し、学習モチベーションを高め、継続的な関心や関与を促すことが期待される、
- ②持続的な効果:実践活動が深い印象を残し、その後の学習に結びつき、認識の持続的な向上が期待される、
- ③行動意欲の強化:実践活動を裏打ちする学習が具体的行動意欲を刺激し、地域活動への積極的参加を促すことが期待される、
- ④愛着形成の促進:実践体験と学習を通じて地域への愛着が高まり、関与の継続や行動意欲の強化に繋がることを期待される。

総括すると、実践的な活動と理論的な学習を組み合わせることが有益であり、特に実践的な活動を先に行うプログラムが効果を最大化する可能性が示唆された。樋口(2023b)も地域資源の言語化の重要性を指摘している。このアプローチは、地域外の評価を通じて地元関係者の再認識や動機づけにも寄与する可能性がある。

課題として、①サンプル数の増加、②長期的な効果の追跡調査、③他の地域や異なる背景の人々・他の地域資源活用プロジェクトへの適用可能性の検証、④プログラム改善に向けた質的データの活用が挙げられる。本研究では、伝統工芸等地域資源を活用したワークショップにおけるプログラム構成の差による持続可能な社会の担い手育成への効果の違いという重要な示唆を得た。課題を踏まえ、今後の研究の進展を期待したい。

※ 本項は、2024年11月30日に開催した日本造園学会九州支部福岡大会における研究事例発表樋口(2024b)を基に再編集して記載した。

－2 大洲和紙（愛媛県）

（１）事業概要

①概要

愛媛県喜多郡内子町のフィールド調査報告を踏まえ、当該地の伝統工芸「大洲和紙」に焦点をあて、次の二つの分析を行った。一つめは、収集した情報を踏まえた地域資源の言語化である。二つめは、大洲和紙制作体験事業「木から紙をつくるワークショップ」（以下、本ワークショップ）での質問紙調査集計結果についての分析である。

これらを通じ、伝統的工芸品「大洲和紙」にかかる体験プログラム構築の基礎情報を整理した。

はじめに、同町フィールド調査のうち、大洲和紙に関する資料を精査し地域資源の言語化を試みた。なお、言語化の基礎となる地域資源の整理については、本稿2.-2 に詳述した地域資源についての項における永田（1988）の地域資源分類表（p9,表-1）を活用した。次に、同町フィールド調査で行った伝統工芸職人2名、普及啓発団体主宰者1名、工芸品店舗関係者1名の計4名へのインタビュー逐語録から、伝統工芸体験プログラムに関連するキーセンテンスを抽出し、これらを用い、内子町で必要とされる伝統工芸体験プログラムのねらいを踏まえた仮説構造及びその成果や効果を評価するための指標について考察した。これらの検討は、筆者の誤認や思考の偏りを避けるため、当事業を企画、運営、指導した関係者3名の協力を得て実施した。この仮説構造と指標を基に質問紙を作成し、本ワークショップの終了後、参加5家族の保護者9名（いずれも松山市内在住の小学生のいる家庭の40代8名、50代1名）から回答を得た。これについて、回答の集計結果をもとに統計分析を通じた評価を行うとともに、事業の仮説構造の妥当性について検討した。

②「木から紙をつくるワークショップ」の運営

ア 運営体制

本事業は、2023年8月6日（日帰り）、11日～12日（1泊2日）、愛媛県喜多郡内子町上田渡にて開催し、合計9家族の参加があった。なお、日帰り、1泊2日共プログラム内容はほぼ同一である。

本ワークショップ構成は以下のとおりである。日帰り、1泊2日で行ったが夜のプログラムを設けているものではなく、同一のアクティビティを実施していることを申し添える。

イ ワークショッププログラム内容

ー1日目【和紙を学ぼう】ー

14:00～ 山林の散策、自生コウゾ、ミツマタの見学

会場の山林には、和紙の原料となる木（コウゾ、ミツマタ）が自生している。前述の通り、かつては、当地をはじめとした山間部でこれらを栽培し、流域の五十崎の紙漉き工場へ卸していた。現在自生しているコウゾ・ミツマタはその時代の名残が野生化して現在に至っている。

15:00～ コウゾ・ミツマタの「皮剥ぎ」体験

和紙の原料となるのはコウゾ、ミツマタの皮である。そのため、枝から皮を剥ぐ。本来は樹木に水分がなくなっている冬場に採集するため蒸して剥がしやすくするのだが、夏場は蒸す作業が不要。スルリと剥げる感覚を体験した。

15:30～講義と実験体験

和紙と洋紙の違いを学ぶための講義と実験を行った。繊維の違いを体験するため、染色や強度に関する実験を行い、参加者はその違いを体験した。

16:00～「へぐり」体験

剥いだ皮にはまだ色の濃い表皮がついている。これを除去しなければ白い和紙はできない。特殊な道具を使い、表皮を落としてゆくのだが、とても骨の折れる作業であることを体験した。

—2日目【木から紙を作ろう】—

09:00～ 内子クラフト研究所見学

近隣の山からとれた様々な種類の木材を使って器などを製作する工房を見学。旋盤などの機械を使って実際に器ができる様子を見学した。

09:30～ 「打かい」体験（コウゾ・ミツマタ別に）

木の皮をたたいて柔らかくする作業であり、工程の中で一番の力仕事となる。道具も木で作成した特殊なハンマー形を使用する。コウゾ、ミツマタに分けて作業体験をしたが、参加者はミツマタの方が柔らかかったという反応。

10:30～ 「紙漉き」体験（コウゾ・ミツマタ別に）

煮込んでさらに柔らかくしたコウゾ 100%とミツマタ 100%の液体に、繊維の沈殿や絡みつきを防ぐトロロアオイの粘液を混ぜる。この液体に紙漉き枠を使って漉く体験。

11:30～ 各地の和紙、世界の和紙の紹介

世界各地の紙について、材料となる植物と漉き方の違いを実際の紙に触れながら行った。

ウ ワークショップの事業仮説構造案と質問紙

事業目的について筆者と運営関係者3名の協議を通じて整理し、これをもとに質問紙調査項目を策定した(表4)。なお、原案は内子町フィールド調査で実施したインタビュー調査結果からキーセンテンスを抽出し筆者が作成したが、4者での協議を行うことで、筆者の偏りや見落としを防ぎ、内容の妥当性を確保した。質問紙による調査は、本ワークショップ終了後に1回行った。なお、回答は各問とも5件



図-18 へぐりの様子



図-19 紙漉きの様子



図-20 漉いた紙に草花をあしらう

によるリッカート法とした。信頼性を検証するため仮説構造項目毎に行った Cronbach α の算出結果は、行動意図： $\alpha=0.78$ 、目標意図： $\alpha=0.79$ 、伝統文化・自然に関する認知： $\alpha=0.74$ 、大洲和紙に関する知識： $\alpha=0.89$ であり、一般に最低限 0.7 以上であれば内的一貫性の信頼は保たれているとし

ていることから、本項目は信頼が確認できたと判断した。

さらに、質問紙質問項目を踏まえ、本稿 1.-3 (3) に詳述した広瀬(1995)の「環境配慮行動の要因

表 4 ワークショップ質問紙質問項目一覧

項番	質問項目
1	内子町を訪れたい。
2	内子町の伝統文化等について自分で調べたりしたい。
3	内子町の伝統文化等について自分で体験しにいきたい。
4	内子町の伝統文化である大洲和紙を自分の生活に取り入れたい。
5	自然環境と地域の文化はつながっていると思う。
6	地域の自然環境や伝統文化を大切にしたいと思う。
7	内子町の自然環境や文化を守り育てたいと思う。
8	内子町が好きだと思う。
9	大洲和紙の良さを知っている。
10	内子町の自然、歴史や伝統文化を知っている。
11	樹木が和紙の原料であることを知っている。
12	和紙の成り立ちを知っている。
13	和紙の加工方法を知っている。
14	今回参加してみて体験料の設定額はどのように感じましたか。

表 5 質問紙質問項目と仮説構造項目

仮説構造項目	質問項目
内子町の持続可能性 配慮行動意図	内子町を訪れたい
	内子町の伝統文化等について自分で調べたりしたい
	内子町の伝統文化等について自分で体験しにいきたい
	内子町の伝統文化である大洲和紙を自分の生活に取り入れたい
内子町の持続可能性に 寄与する目標意図	地域の自然環境や伝統文化を大切にしたいと思う
	内子町の自然環境や文化を守り育てたいと思う
愛着	内子町が好きだと思う
内子町の伝統文化と自然に 関する認知	自然環境と地域の文化のつながっていると思う
	大洲和紙の良さを知っている
	内子町の自然、歴史や伝統文化を知っている
	和紙の成り立ちを知っている
内子町の大洲和紙に関 する知識	樹木が和紙の原料であることを知っている
	和紙の成り立ちを知っている
	和紙の加工方法を知っている

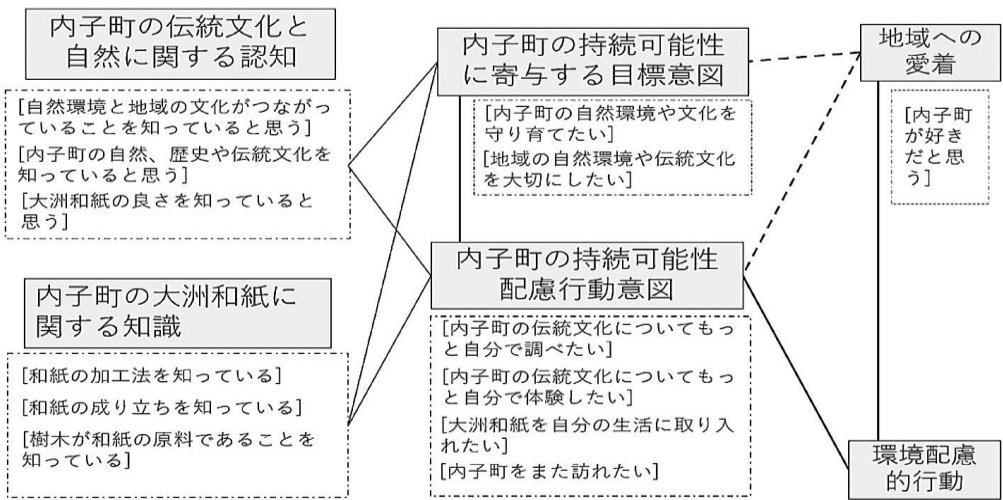


図 21 事業仮説構造モデル案

(2) 結果

質問紙調査結果は、「質問紙調査基本統計量一覧」(表6)の通りであった。本項では、これに基づく評価と考察を述べる。

①ワークショップ全体の評価

項番9～13は、ワークショップ参加での学びの成果を問うた項目である。このうち特に、項番11「樹木が和紙の原料であることを知ることができた」、項番12「和紙の成り立ちを知ることができた」(各々平均4.89)、項番13「和紙の加工法を知ることができた」(平均4.78)、項番9「大洲和紙の良さを知ることができた」(平均4.44)は高いスコアを示している。また、これらの項目は標準偏差も0.33～0.53であり、ほぼ全ての参加者が一貫して高く評価していると考えられることから、参加者はワークショップを通じてこれらの知識をしっかりと得たことが示唆される。

②大洲和紙への評価

項番9「大洲和紙の良さを知ることができた」(平均4.44)は高い評価を受けたと考えられ、また、項番4「大洲和紙を自分の生活に取り入れたい」(平均4.11)についても比較的高い評価を示しており、これらは、ワークショップへの参加が地域の伝統工芸への理解を得て、大洲和紙に対する認識と正の評価を構築し、参加者の日常生活に影響を及ぼす可能性が示されたと考えられる。

③内子町の自然や伝統文化、愛着への評価

項番8「内子町が好きだと思った」(平均4.22)、「内子町の自然環境や文化を守り育てたい」(平均4.11)、「地域の自然環境や伝統文化を大切にしたい」(平均4.22)という項目も高く評価されており、ワークショップが地域への愛着や関心を高める効果を持っていることが推察される。ただし、項番8の標準偏差は0.83と比較的高いことから、評価のばらつきがみられており、この解釈には注意を要する。また、項番2「内子町の伝統文化についてもっと自分で調べたい」(平均3.67)や項番3「内子町の伝統文化についてもっと自分で体験したい」(平均3.89)、は他と比較して低い評価となっている。これは、参加者がワークショップでの全体的な学びに満足した一方で、さらに自ら深く調べ、更なる体験へとつながる動機にはなっていない可能性を示唆していると考えられる。

④体験料の妥当性の評価

項番14「体験料の設定額」(平均4.22)も高い評価となっており、標準偏差も0.67と評価への大きなばらつきがあるともいえない。ワークショップでの体験内容について、適切な体験料が設定されて

表6 質問紙調査基本統計量一覧 (n=9)

項番	質問項目	平均	標準偏差	中央値	最小値	最大値
1	内子町をまた訪れた	4.00	0.71	4.00	3.00	5.00
2	内子町の伝統文化についてもっと自分で調べたい	3.67	0.50	4.00	3.00	4.00
3	内子町の伝統文化についてもっと自分で体験したい	3.89	0.33	4.00	3.00	4.00
4	大洲和紙を自分の生活に取り入れたい	4.11	0.60	4.00	3.00	5.00
5	自然環境と地域の文化が繋がっていると思う	4.00	0.50	4.00	3.00	5.00
6	地域の自然環境や伝統文化を大切にしたいと思う	4.22	0.67	4.00	3.00	5.00
7	内子町の自然環境や文化を守り育てたいと思った	4.11	0.78	4.00	3.00	5.00
8	内子町が好きだと思った	4.22	0.83	4.00	3.00	5.00
9	大洲和紙の良さを知ることができた	4.44	0.53	4.00	4.00	5.00
10	内子町の自然、歴史や伝統文化を知ることができた	4.00	0.71	4.00	3.00	5.00
11	樹木が和紙の原料であることを知ることができた	4.89	0.33	5.00	4.00	5.00
12	和紙の成り立ちを知ることができた	4.89	0.33	5.00	4.00	5.00
13	和紙の加工法を知ることができた	4.78	0.44	5.00	4.00	5.00
14	体験料の設定額	4.22	0.67	4.00	3.00	5.00

いたと判断されていることが示唆される。

⑤質問紙調査結果の統計解析からワークショップ事業仮説構造案を検討

前項では、基本統計量から、ワークショップの評価分析を行った。つづいて、本項では、「事業仮説構造モデル案」(図 11) の妥当性について検討する。

事業仮説構造モデル案に示した各項目についてその構成項目による合成平均点を次の通り作成した(カッコ内平均は合成平均点)。

「内子町の伝統文化と自然に関する認知」(平均 4.15)

「内子町の大洲和紙に関する知識」(平均 4.85)

「内子町の持続可能性に寄与する目標意図」(平均 4.17)

「内子町の持続可能性配慮行動意図」(平均 3.92)

「地域への愛着」(平均 4.22)

これらについて、スピアマンの順位相関分析を行い、事業仮説構造モデル項目相関分析結果 (r) (表 7) の結果を得た。本相関

分析手法を用いたのは、少ないサンプル数であることと、非正規分布を踏まえた判断からである。なお、分析には清水(2016)による HADon18 を用いた。

相関係数は-1~1 の間をとり、一般に 0.7~1:強い相関がある、0.4~0.7:比較的強い相関がある、

0.2~0.4:弱い相関がある、0~0.2 ほとんど相関がない、と解釈することが多い。本稿でもこれを準用して事業仮説構造モデル項目相関分析結果 (r) (表 7) を検討すると、「目標意図合成平均」と「伝

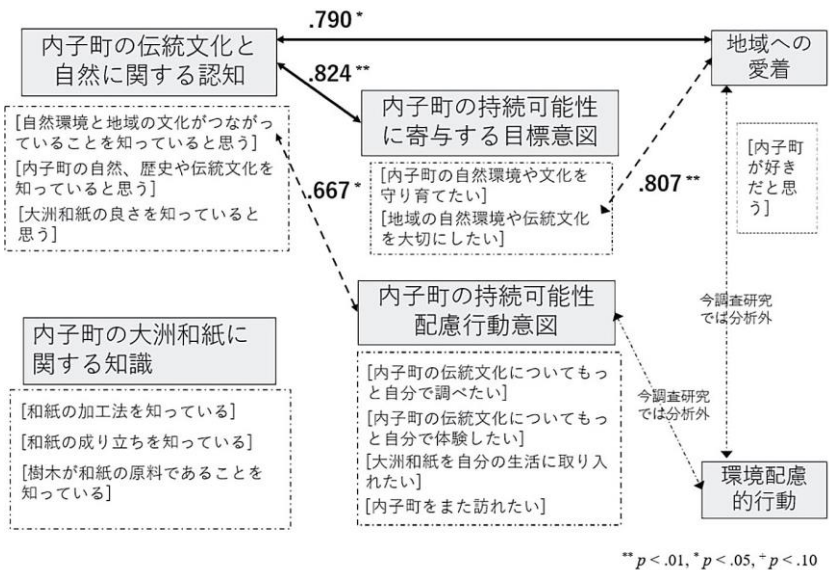
統文化と自然の認知合成平均」に強い相関(r=0.824、p<0.01)が、また、「愛着」と「伝統文化と自然の認知合成平均」にも強い相関 (r=0.790、p<0.05)が見られ、同相関とも統計的に有意であった。

さらに、上記合成平均を算出するために用いた各下位項目(質問紙質問項目)についてもスピアマンの順位相関分析を行った

表 7 事業仮説構造モデル項目相関分析結果 (r)

	行動意図 合成平均	目標意図 合成平均	愛着(内子町が好きだと思った)	伝統文化と自然の認知 平均	大洲和紙の知識平均
行動意図 合成平均	1.000				
目標意図 合成平均	0.496	1.000			
愛着(内子町が好きだと思った)	0.019	0.580	1.000		
伝統文化と自然の認知平均	0.429	0.824**	0.790*	1.000	
大洲和紙の知識平均	0.226	0.492	0.464	0.525	1.000

** p < .01, * p < .05, + p < .10



** p < .01, * p < .05, + p < .10

図 22 事業仮説構造モデルの妥当性検討結果

ところ、「伝統文化と自然の認知合成平均」を構成する下位項目「自然環境と地域の文化がつながっていると思う」と「内子町の持続可能性行動意図」に比較的強い相関 ($r=0.667$, $p<0.05$) が見られ、更に、「内子町の持続可能性に寄与する目標意図」を構成する下位項目「地域の自然環境や伝統文化を大切にしたい」と「地域への愛着」に強い相関 ($r=0.807$, $p<0.01$) が見られた。

これらの分析結果を踏まえ、事業仮説構造モデル案 (図 21) を検討した結果を事業仮説構造モデルの妥当性検討結果 (図 22) に示す。まず、当初想定していた「目標意図」と「行動意図」の相関を確認することができなかった。更に、「認知」と「知識」各々と「行動意図」との相関を確認することができず、「目標意図」は「知識」との相関を確認することができなかった。

これらの結果から、事業構造仮説モデル案 (図 21) は全体として妥当とは言えない結果となったものの、認知と目標意図及び愛着との強い相関が見られたほか、各上位項目を構成する下位項目の中には、いくつかの他の上位項目との相関が確認されたものもあったため、モデルの評価にはこれらの点を考慮する必要があることがわかった。

(3) 考察

本調査研究では次の通りの成果と課題を得ることができた。成果については次の三点が挙げられる。第一に、地域資源である大洲和紙の製造過程とともにその自然と歴史について整理し言語化することを通じ、具体的な体験をワークショップとして提供するひとつの方法を示すことができた。このように、地域資源を言語化して整理することで、体験プログラムの意味や成果目標に深みを持たせられることが示唆された。

第二に、本ワークショップの質問紙調査からは、上記を裏付けるように、参加者が和紙の製造過程の理解について高い評価を与えていることから、大洲和紙に対する理解と関心が深まったことが推察される。特に、和紙の原料や成り立ち、製造工程についての評価も高く、標準偏差も小さいことから参加者間で一定の評価が得られたと推察される。こうした体験は、地域の伝統文化や自然環境への理解を深めさせ、地域経済や文化の持続可能性に寄与する可能性が推察される。

第三に、当該地域の地元の団体が連携して地域資源を活用し、独自の視点を持つ活動を協力して行うことで、専門性と多様性に富んだ体験が提供され、さらにその他の地域の方々に対しても、かつて内子町が持っていた和紙産業の歴史や地域資源の再評価が促進されることにもつながると期待される。特に、ワークショップの活動を通じて、コウゾやミツマタといった和紙の原料となる植物の存在が再認識され、地域資源の価値が見直される契機となる可能性も秘めている。このように、地域資源の言語化とそれらを踏まえた体験ワークショップの展開は、地域への理解促進と愛着醸成の効果が期待されることが示唆された。

課題については次の三点が挙げられる。

第一に、質問紙調査の結果、自発的に地域の伝統文化や自然について深く学び、体験を広げる動機が低く評価された点が挙げられる。これに関し、今回の事業仮説構造モデルの参考とした広瀬の「環境配慮行動の要因関連モデル」の前提となる Schwartz の「規範活性化理論」を含めてさらに考察する必要がある。つまり、行動の有無に影響を与える「道徳意識」を構成する「重要性認知」と「責任感」をどのように意識させるかが課題である。例えば、和紙作りの体験後に、参加者が和紙との関係性を見直す活動や、和紙の普及や地域資源の活用を考えるグループワークをプログラムに組み込むことで、具体的な役割意識が芽生え、重要性認知と責任感を生じ、「道徳意識」を高め、行動に結び付ける仕組みとなることが考えられる。

第二に、ワークショップでの「内子町の伝統文化と自然に関する認知」や「内子町の大洲和紙に関する知識」の向上が「内子町の持続可能性（に貢献する）配慮行動意図」に結びつくよう、プログラム内容を再構成し、参加者が実際に行動に移せるような具体的な指導や支援が必要と考えられる。

第三は、事業モデルの再検討である。事業仮説構造モデルの評価結果を踏まえ、プログラムの効果を正確に測定するための評価モデルの再構築が求められる。特に、認知や愛着が持続可能な行動意図にどのように影響を与えるのか、さらなる検討と分析が必要である。

以上の成果と課題を踏まえ、本ワークショップを通じた地域資源や伝統工芸の魅力を地域内外の幅広い層に伝えるため、オンラインやメディアを活用した情報発信の強化等、アプローチ方法をさらに模索する必要があることを提起する。また、本ワークショップでの分析サンプルが9家族分と少数であったことも課題であるため、今後、より多くの参加者を得て実施されるワークショップを対象とした調査研究にも期待する。

※ 本項は、樋口（2024a）の内容を基に再編集して記載した。

5. まとめと課題

地域資源情報の編集とストーリーテリング、大洲和紙の体験プログラム、そして櫨の和ろうそくの体験プログラムに関する調査研究を踏まえ、それぞれの成果と課題について考察する。

地域資源情報の編集とストーリーテリングにおいては、地域資源の言語化の重要性が明らかになった。地域資源を認識し、それらを組み合わせて新たな意味を創出することは、体験プログラムの企画において欠かせない要素である。こうして生み出された物語（ストーリー）は、他者に語るだけでなく、企画者自身が地域資源の本質を再発見し、プログラムの基盤を築くことにつながる。ストーリーテリングを通じてデータを情報へと変換し、それを編集して物語を紡ぎ出すプロセスは、地域資源の魅力を最大限に伝える手段であり、参加者に深い理解と感動をもたらす重要な役割を果たす。

大洲和紙の体験プログラムでは、和紙の製造過程や背景となる自然環境、歴史的要素を整理し言語化することで、地域資源の魅力に触れる具体的な体験を提供した。その結果、参加者の理解と関心が高まることが確認され、特に和紙の原料や製造工程への評価が高かった。また、地元団体との連携が、専門性と多様性に富む体験を可能にし、地域資源の価値再評価を促進した。一方で、質問紙調査の結果、自発的な学びや地域資源との関係性を見直す動機が低いという課題が浮上した。これに対応するため、具体的な行動に結びつく意識を高める仕組みや行動意図を具体化するプログラム構成の再検討、さらに効果を正確に測定する評価モデルの再構築が求められる。

櫨の和ろうそくの体験プログラムでは、実践活動と理論学習を組み合わせる構成が効果的であることが示された。実践活動が初期段階で参加者の関心を引き出し、学びの意欲や地域への愛着を強化するきっかけとなった。特に午前の部の構成では、具体的な行動意欲が強く示され、地域活動への積極的な参加を促す可能性が確認された。この活動は地域資源の理解を深め、持続可能な社会を支える人材育成に寄与することが期待される。ただし、サンプル数の増加や長期的な効果の追跡調査、他地域への適用可能性の検証、質的データの活用によるプログラム改善といった課題が残されている。

さらに、青少年教育施設が地域の伝統文化を認識し、それを基盤とした活動を行う意義も重要である。地域の伝統文化は、青少年教育において地域社会とのつながりを育む重要な要素であり、次世代への文化継承にも寄与する。青少年教育施設で地域の伝統文化を体験学習として取り入れることで、地域資源に対する理解を深めると同時に、地元の歴史や自然への愛着を育む効果が期待される。例えば、大洲和紙や櫨の和ろうそくを題材としたプログラムでは、若い世代に地域文化の魅力を伝えるだけでなく、実践活動を通じて創造力や協働意識を育む場を提供する。また、ストーリーテリングを活用し、伝統文化の背景や価値観を主体的に再発見させることで、学びを深化させることができる。

加えて、青少年教育施設が地域の伝統文化を中心としたプログラムを推進することは、地域社会との連携を強化し、文化資源の保存と活用を支える基盤を形成する。また、地域への貢献意識を青少年に育むことで、将来的に地域社会の持続可能性に貢献する次世代リーダーの育成にも寄与する。課題として、プログラムを現代の若者に親しみやすい形に工夫し、デジタル技術を活用した情報発信やオンライン連携によるアクセスの向上が必要である。

これらの取り組みを通じ、青少年教育施設が地域の伝統文化を次世代に伝える役割を果たし、地域社会全体で文化を守り育む循環を形成することが期待される。地域資源と教育の融合が、持続可能な未来への力強い基盤となるだろう。ここで示した成果と課題を参考にして頂き、日本全国の青少年教育施設をはじめ、様々な機会を捉え、実践活動及び研究活動が推進されることを期待している。

6. 謝辞

本研究の推進及び報告書作成の基礎となっている各論文等は、その研究設計及び分析並びに執筆、実践事業にかかる企画運営、会場等提供について、各論文等共同執筆者で本報告書執筆者の指導教官である九州大学芸術工学研究院の朝廣和夫教授に多大なるご指導及びご理解並びにご協力を賜りました。また、実践事業について、櫨の和蠟燭では、ハゼノキの復活と櫨蠟の普及啓発事業を展開している松山櫨復活委員会の矢野眞由美代表に多大なるご協力とご指導を賜りました。大洲和紙では、和紙・手漉き紙専門の活版印刷等を通じて大洲和紙の魅力の普及に取り組む団体の主宰者、全国各地で紙の展示販売やワークショップや手漉き紙を活用した商品の企画や自身の紙をめぐる世界の旅を基礎にした情報発信などに取り組む団体の主宰者、内子町小田地区の山林の樹木を使い生活雑貨等の木工品を制作する活動を行う団体の主宰者の3名の多大なるご協力とご指導を賜りました。ここに改めて、各位への謝辞を表します。

参考・引用文献

UNESCO(2020),Education for sustainable development: a roadmap,p9

樋口 拓 (2023a), 環境教育、E S Dの歴史的変遷と定義～青少年教育における環境教育の視点から～, 国立青少年教育振興機構

UNESCO(2006), Framework for UNDESD International Implementation Scheme, UNESCO Education Sector,pp14-15

持続可能な開発のための教育に関する関係省庁連絡会議(2021),「我が国における『持続可能な開発のための教育 (ESD) に関するグローバル・アクション・プログラム』第二期 ESD 国内実施計画, pp.12-13

持続可能な開発のための教育 (ESD) に関するユネスコ世界会議(2021), 持続可能な開発のための教育 (ESD) に関するベルリン宣言, https://www.mext.go.jp/unesco/004/mext_01485.html(2024.11.25 最終参照)

国立青少年教育振興機構 (2022a), 青少年教育関係施設基礎調査報告書, 国立青少年教育振興機構,p2
文部科学省 (2023), 第 4 期教育振興基本計画, https://www.mext.go.jp/content/20230615-mxt_soseisk02-100000597_01.pdf(2024.11.25 最終参照),p8

I.Ajzen(1991).The Theory of Planned Behavior.Organization Brhavior and Human Decision Oricesses,50,179-211

Schwartz(1977).Normative influences on altruism.Advances in experimental social psychology,10,221-279

樋口 (2024a), 伝統的工芸品を活用した体験活動プログラム開発による地域の持続可能な発展にむけた予備的研究—愛媛県内子町の大洲和紙体験プログラムに着目して—, 青森大学付属総合研究所紀要 Vol.26, No.1,p.p.23-34

広瀬 幸雄(1995a-1).環境と消費の社会心理学,名古屋大学出版会,43

広瀬 幸雄(1995a-2).環境と消費の社会心理学,名古屋大学出版会,44-47

前川洋平 (2018), 伝統工芸品研究の現状と展望, 林業経済 71 (6), pp4-5]

樋口拓 (2023b), 青少年教育施設における伝統的な地場産業体験活動の導入に関する諸概念の検討-「地域」「地域資源」「伝統文化」に着目して-, 青少年教育研究センター紀要第 11 号,pp56-66,p59

外山徹(2004), 生きた文化財・伝統的工芸品の継承に関する現状と課題, 明治大学博物館研究報告 9:21-37, p.34

丸谷耕太 (2012), 伝統工芸と産地に関する研究 - 原材料と産地に着目して -, 東京工業大学博士論文, p.1

小栗有子 (2010), ESD 研究における「地域」との向き合い方,環境教育 Vol20-1,p.p.18-19

永田恵十郎 (1988), 地域資源の国民的利用, 社団法人農山漁村文化協会, p.88

酒井 太一(2016):向老期世代における“地域への愛着”測定尺度の開発, 日本公衆衛生誌第 63 巻,664-63-73

清水 祐士(2016):フリーの統計分析ソフト HAD:機能の紹介と統計学習・教育, 研究実践における利用方法の提案,メディア・情報・コミュニケーション研究,59-73

樋口 (2024b), 地域の伝統的景観に紐づく伝統工芸品を活用した持続可能な社会の担い手育成を見据えた体験プログラムの効果的展開の検討-樫の和ろうそくづくりワークショップを題材に-, (公社) 日本造園学会九州支部 研究・事例報告集 Vol.32, p.p.55-56

- 吉井町誌編纂委員会編（1979），吉井町誌第2巻，吉井町，p.413-429
- 大石孔ほか著（2002），伝統の美と技和ろうそくの世界，文葉社，pp.4 -14
- 樋口拓（2023b），青少年教育施設における伝統的な地場産業体験活動の導入に関する諸概念の検討-「地域」「地域資源」「伝統文化」に着目して-，青少年教育研究センター紀要第11号，pp64
- 成安造形大学付属近江学研究所（2013），文化誌近江学第6号，サンライズ出版
- 永田恵十郎（1988），地域資源の国民的利用，社団法人農山漁村文化協会，p.88
- 矢野真由美（2015），櫨の道，松山櫨復活委員会
- 樋口（2024a），伝統的工芸品を活用した体験活動プログラム開発による地域の持続可能な発展にむけた予備的研究ー愛媛県内子町の大洲和紙体験プログラムに着目してー，青森大学付属総合研究所紀要 Vol.26, No.1,p.p.21-33

執筆者 国立青少年教育振興機構青少年教育研究センター

企画室長兼副センター長 樋口 拓ⁱ

i 九州大学大学院芸術工学府

「青少年教育施設における伝統文化実践研究事業（報告書）

～地域の伝統文化を活かした体験活動プログラムの導入にむけて～」

2025 年 3 月

編集・発行

国立青少年教育振興機構青少年教育研究センター

〒151-0052 東京都渋谷区代々木神園町 3-1

電話番号 03-6407-7617 F A X 03-6407-7619

Mail kenkyu-soumu@niye.go.jp
